

50年によせて1

2、3年生の皆さんには始業式で、「この場にいるのが今年だというのは偶然なのだけれども、その偶然を大切にし、ともに50年を祝い、未来をつくる一步を印しましょう。」と話した。1年生の皆さんには、「皆さんは光陵50期生です。50周年の当事者として、良きものを継承し、新たな活力をつくり出す、そのような気持ちを高めて、今日からの高校生としての生活に励んでほしいと願います。」と入学式の挨拶で述べた。さらに4月発行の「校長室から10」では、「50年目の開校記念日に」と題して、光陵は伝統校と呼び得るか皆さんに問を投げかけるとともに、現代の光陵生が次代の光陵生に繋いでいくものは何か、そのことを折にふれ考える年にしてほしいという期待を記した。

1966年に開校した私たちの光陵高校が50年目を迎えた。この秋には記念式典が実施される。そこで今号から式典直前までの間、「50年によせて」を続けることとする。その初回にあたって、生徒会長の日野涼香さんに寄稿していただいた。

光陵高校の伝統といえば、何を思い浮かべますか？真っ先に浮かんだのは、やはり「応援団」です。入学してすぐに始まったのは、激しい応援練習でした。声はかれ、身体は筋肉痛。2時間目と3時間目の間の早弁。とても辛いものでした。でもそうした練習の中で知らない者どうしのクラスメートが「仲間」になっていきました。団員の先輩たちの優しさゆえの厳しさにも気づけるようになりました。縦・横と、しだいに仲間意識が広がっていくのを感じました。この仲間意識が光陵生としての結束を生んでいるのだと思います。

中学生のときに光陵祭に行ったことがありました。その時の光陵生は優しい、温かい雰囲気をもっているような気がしました。実際に光陵生になった今もかわらず、その雰囲気を感じています。先輩・後輩の楽しい会話や、校内どこを歩いても聞こえてくるあいさつの声。ふと光陵生でよかったと、ほっとした気持ちになります。50年後、この校舎は改装されて全く違うものになっているかもしれませんが、もちろん生徒も先生も変わっているはずですが、この温かい光陵生の雰囲気は変わらず残っていてほしい、いや、残っているはずだ、と思うのです。形には表しようのない、優しく温かい雰囲気こそ、光陵生の誇るべき特色であり、「伝統」といえるのではないのでしょうか。

「光陵高校の伝統は何ですか」という質問は、結局は「光陵生の好きなところはどこですか」という質問と同じことなのかもしれませんが、学校の歴史とは、生徒の活動の歴史なのでから。

50周年目の今、光陵生である私たち。今こそ改めて光陵高校を見つめ直してみましよう。50年後にも、その先にも残したい「伝統」とは何か。

あなたにとって、私たちにとって、「光陵生の好きなところはどこですか」

私も昨年着任してすぐに「温かい光陵生の雰囲気」を感じ取った。「校内どこを歩いても聞こえてくるあいさつの声」という表現にもまったく同感だ。「光陵は伝統校たり得るか」という自問への答は先送りするものの、日野さんの、「変わらず残っていてほしいこと、ずっと残っていくはずのことが伝統といえるのではないか」という言葉は説得力があると思う。その際、自分たちの学校を好きでいられることは幸福なことだとも思う。そして、光陵を見つめ直そうという呼びかけもまた大事にしたい一文であった。

授業のようすから

中間テスト後の1か月、ほぼすべての先生の授業を見せていただいた。多くの先生が、高度な内容とわかりやすい授業に努めておられ、そのような授業を受ける皆さんは幸福である。生徒の授業の受け方もほとんどの生徒について良しと言えそうだ。とくに大事そうな所での視線、態度は頗る良い。良いからこそ敢えて苦言を三つ呈す。第1に、授業開始のチャイムが鳴ったら席に着き授業にそなえよ。その際、弁当を食べているなどはもってのほかである。第2に、机の上に余分なものを置かないこと。その授業に必要なもののみにすることが授業集中可否の鍵である。第3に、ワイシャツを外に出したり、ズボンの裾を折り曲げて授業に臨むことなかれ。休み時間が短く、机上也狭い、その上このところの暑さとくれば、目をつむれば済むことばかりなのであろうが、看過することなく、光陵生にきちんとした格好良さを求めたいと思う。

来週からの期末テスト、全力で取り組もう！ 夏はこれからが本番だ!!!